

### 人文・ 社会系

# 脳死・臓器移植問題から 「人間改造」問題へ

東京大学大学院人文社会系研究科 教授 **島 蘭 進**



#### 研究の背景

生命科学の発展は著しく、多くの人々が長寿を享受できるようになりました。しかし、その一方で、先端医療がほんとうに福音であるのか、新たな科学的成果や技術応用によってかえって人のいのちを軽んじるような事態も起こってきているのではないかと懸念も広まっています。日本では脳死・臓器移植問題を通して先端医療技術への懸念が高まり、「脳死を人の死としない」という立場が一定の発言力をもつようになりました。これは欧米先進諸国には見られないことであることから、宗教文化や思想や価値観の違い、あるいは歴史的経験の違いが反映しているのではないのでしょうか。

#### 研究の成果

私自身は自らが代表者を務めた「現代人の宗教意識の動態に関する宗教学的研究」でこの問題の宗教学的考察に着手しました。続いて、町田宗鳳を代表者とする科学研究費補助金基盤研究(B)「脳死・臓器移植に関する比較宗教学的研究」では、私たちが今後の生命科学や先端医療が宗教を背景にもつような価値観とどう折り合いを付けていくことができるかを考察する共同研究に取り組みました。樋野興夫、加藤真三、斎藤政樹らの医学研究者と、「人体改造」問題に早くから注目してきた栗屋剛、そして鎌田東二、八木久美子、上田紀行ら鋭い問題意識をもつ宗教学者、文化人類学者がメンバーに加わりました。

ところがこの共同研究がスタートした平成14年は、アメリカのブッシュ政権の下の生命倫理評議会が、重要な問題提起を行った年でもありました。その成果はBeyond Therapy (2003年、『治療を超えて——バイオテクノロジーと幸福の追求』邦訳、平成17年(図1))として刊行され世

界的に反響をよびました。私たちの共同研究はこうした世界の生命倫理の新たな展開が、脳死・臓器移植をめぐる日本で行われてきた議論と密接な関わりをもつことに注目し、文化を考慮した「人間改造」論の深化を試みることになりました。北米、ヨーロッパ、アジアなど海外各地の研究者との交流や現地視察を交え濃密な討議を重ねていったのが、『人間改造論』(新曜社、2007年)(図2)です。

#### 今後の展望

「エンハンスメント」をめぐる欧米から起こってきた議論を日本の文脈からいち早く捉え返し、新たな問題領域を示唆することができたのは、この科研費のおかげです。しかし、こうした取り組みはまだ緒についたばかりです。国際的な研究交流もまだまだ足りません。さらに多方面の研究者を巻き込んだ共同研究の発展がぜひとも必要です。

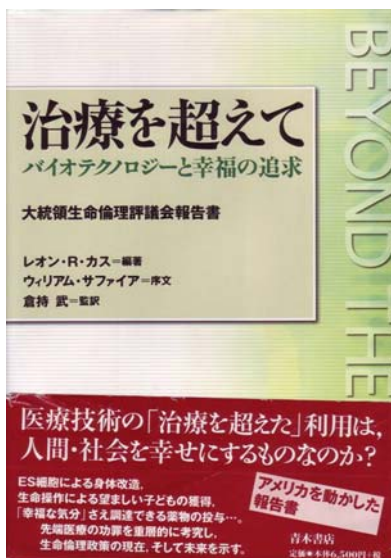


図1 『治療を超えて——バイオテクノロジーと幸福の追求』



図2 『人間改造論』

#### 関連する 科研費

平成13-14年度 基盤研究(C)「現代人の宗教意識の動態に関する宗教学的研究」  
平成14-17年度 基盤研究(B)「脳死・臓器移植に関する比較宗教学的研究」(研究分担者)  
研究代表者:町田宗鳳(東京外国語大学)